

氏名（本籍）	アナミカ スルタナ
学位の種類	博士（国際日本研究）
学位記番号	博 乙 第 2984 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	在日バングラデシュ人ムスリム移民に関する実証研究

主査	筑波大学 准教授	博士（国際政治経済学）	明石 純一
副査	筑波大学 准教授	博士（国際政治経済学）	大友 貴史
副査	筑波大学 准教授		宮坂 渉

論文の要旨

本論文「在日バングラデシュ人ムスリム移民に関する実証研究」は、日本に在住するバングラデシュ人の定住プロセス、生存戦略、アイデンティティ形成を明らかにすることを目的として書かれたものである。

第1章の「はじめに」では、本研究の目的と意義が述べられている。上記の目的に加えて、現代の日本に暮らすバングラデシュ人の動態を捉える実証研究が乏しい点が提示されている。また、本研究で用いたインタビューを中心とする調査手法についての説明がなされている。さらに、本論文の理論的および概念的な枠組みについての概説がある。具体的には、移民の定住プロセス、生存戦略、アイデンティティ形成であり、これら3つは、第3章から第5章での検討にそれぞれ対応している。また、インフォームドコンセントや調査協力者への倫理的・宗教的配慮等の手続きについても、本章で説明されている。

第2章の「先行研究」では、本研究テーマに関連する先行研究の整理が試みられている。第1節では、バングラデシュ人の国際移住労働の背景を、とくに1971年の独立以降に焦点を当てて概観している。こうした歴史的背景を踏まえたうえで、本章では、現在の日本在住バングラデシュ人や彼らのコミュニティの諸相をまとめている。今日、日本在住者の多くは東京都とその近郊に居住しており、とくに東京都北区への集住傾向が報告されている。第2節では、諸外国におけるバングラデシュ人ディアスポラに関する先行研究が整理されている。欧米諸国やオーストラリア、湾岸諸国、マレーシアの事例に触れているほか、移民のアイデンティティの強化や変容の背景にある要因や世代間ギャップに焦点が当てられている。加えて、既存の日本在住バングラデシュ人に関する先行研究の知見と、その範囲を整理している。

第3章「バングラデシュ人の語り(1)：移住要因と定住プロセス」では、日本に暮らすバングラデシュ人の移住要因と定住プロセスについて、フィールド調査で得られた語りをもとに考察が加えられている。第1節では、移住の背景をプッシュ要因とプル要因に分けて考察している。プッシュ要因としては、バングラデシュの社会経済的流動性の低さが挙げられる。ここで明らかにされているのは、調査協力者の多くが、家族の社会的地位を向上させるために、より高い収入が得られる国への国際移住を選択している一方で、国際移住に係る費用は、借金や土地の売却によって調達しており、借金の返済や家計支援の重責を背負って日本で生活している現実がある。第2節では、バングラデシュ人ムスリムの定住プロセスが複数の側面から考察されている。第一に、移住の歴史的背景に関しては、ベンガルと日本との友好関係の礎を築いた祖先への尊敬が、日本への愛

着と日本人との共存の願いに結びついていることが述べられる。第二に、ホスト国の政策に関しては、国籍や在留資格をめぐる制度というハードルが調査協力者から語られる。第三に、ホスト社会の寛容性に関しては、多くの調査協力者が、同質性を重視する日本社会から「よ者」として認識されていると表明していることが述べられている。第四のコミュニティに関しては、日本在住バングラデシュ人が、コミュニティの活動を通して日本への愛着を深めていることが明らかにされている。とくに、バングラデシュ人ムスリムは2つのコミュニティ、すなわちバングラデシュ人コミュニティとムスリムコミュニティに所属することで、精神的安定と幸福を涵養し、ホスト社会への定住を成功させようとしている点が指摘されている。

第4章「バングラデシュ人の語り(2)：生存戦略とその課題」では、日本在住バングラデシュ人の生存戦略であるモダス・ビベンディ構造と多文化共生、および、それらが抱える課題について考察されている。第1節では、異なる集団間が互いに違いを認識し、多様性に対する寛容性を磨いていくことによって、妥協点と心地よい接点が見出されるとされる。具体的事例としては、Eidの祭りやラマダンがあげられ、飲酒に関する文化の妥協点が明らかにされている。他方、日本社会とのコンタクトゾーンの維持に困難を感じるバングラデシュ人がいること、そしてその多くが、日本社会からの拒絶や疎外を感じていたことが考察される。第2節では、モスクやエスニック食品店、文化的・宗教的イベントが主要な役割を果たしていること、また、日本在住のバングラデシュ人ムスリムは日本の公共の場に物理的空間を作り出すことで、バングラデシュ人の存在や母国文化を可視化することに成功している点が述べられている。

第5章「バングラデシュ人の語り(3)：アイデンティティ形成」では、日本在住のバングラデシュ人ムスリムのナショナルアイデンティティと宗教的アイデンティティの維持と継承について分析がなされている。本章では、世代間のギャップに焦点を当てたアイデンティティの変容も検討されている。具体的には、同章の第1節は、ナショナルアイデンティティに着目し、祖国との経済的・社会的・文化的つながりが保たれていることが、その維持と継承の重要な要素の一つであることが述べられる。こうしたつながりは、本国への送金やインターネットを介したコミュニケーションと情報伝達や、ベンガル文化の実践によって維持される点が議論されている。第2節で焦点を当てた宗教的アイデンティティについては、以下の点が論じられている。まず、宗教の実践の継続によって、宗教的アイデンティティの維持と継承が達成される。第一世代は、自らが宗教を実践している姿を見せることで、第二世代がイスラムの教えやムスリムの義務を理解し、宗教的アイデンティティを育んでいくことを期待する。さらに、ハラール食品やムスリムの服装など、日々の生活に根ざした宗教的文化も継続される。加えて、宗教的アイデンティティの維持と継承においては、宗教的行事も主要な役割を担う。とくにラマダン月中のイフタールとEidの祭りは、日本在住のバングラデシュ人ムスリムの結束を強め、集団アイデンティティを共有する場として機能する。第3節では、主に世代間で見られるアイデンティティの変容について検討されている。第一世代の多くが、親子間でアイデンティティや価値観にギャップが生じることに強い懸念を表明していたこと、一方で、第二世代は、すでに日本人との交流により、日本と母国の文化や価値観の違いを経験していた点が明らかにされている。また、言語をめぐる問題もアイデンティティの変容や揺らぎに直接的な影響を与えていた点が指摘される。

第6章「結論」では、本研究の知見を総括し、残された課題と今後の展望を述べている。第一の知見は、非移民社会の日本では、移民が選択し得る既存の戦略、すなわち同化、分離、周縁化、統合はいずれも効果的ではなく、在日バングラデシュ人ムスリムは「順応」という独自の戦略を選択していた、という点である。第二は、在日バングラデシュ人ムスリムが、バングラデシュ人コミュニティとムスリムコミュニティという2つの異なるコミュニティに属することで、独自アイデンティティの維持と次世代への継承を実現しようとしていた、という点である。さらに本章では、民族居住地(ethnic enclaves)を作ることなく、日本の主流社会や他のエスニックグループとの接点を維持してきたバングラデシュ人の経験が、国際化が進む今日の日本にその

目指すべき未来を提示しているという将来展望、ならびに本研究の調査に内在する限界や今後解決すべき研究上の課題を述べている。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、日本に在住するバングラデシュ人の定住プロセス、生存戦略、アイデンティティ形成を明らかにすることを目的として書かれたものである。日本に暮らす外国籍住民が増加するなかで、エスニックコミュニティも多様化している。日本は、本論文が示すように、「非移民社会」として位置づけられるが、外国籍住民の定住化が進んでいることは統計的にみても事実であり、彼（女）らとホスト社会の相互関係の解明には、重要な意味がある。また、上記に述べたような日本社会の変化を反映し、在日外国人コミュニティの調査は近年徐々に増えているが、バングラデシュ人を対象とした体系的な実証研究はなされておらず、本論文が 130 名を超える調査協力者の豊富なナラティブと、主にその調査結果に依拠する多角的な分析の成果であることに鑑みると、本論文には、既存の研究にはみられない学術的ならびに資料的価値があり、そのことが本論文に高い独創性をもたらしている。

一方で、本論文の内容には次の問題点があげられる。理論的土台として援用されている「モダス・ビベンディ構造」の説明を含め、移民の社会適応や社会統合に関する国内外の学術的系譜について、行き届いた議論がなされているとは言い難い。日本に限定しても、その外国人の大規模な受入れは、日系人の流入と定住が増える 1990 年代初頭から既に 30 年近くの経験があり、関連する膨大な研究蓄積がある。しかし、こうした成果は先行研究との関係では明示的には消化しきれておらず、ホスト社会への統合に関する概念的整理や理論的分析には物足りなさが残る。さらに、本論文にも指摘があるが、100 名を超えるインタビュー対象者のなかでも、人数・割合的には移民第一世代が多くを占めていることからすれば、実証の精度に改善の余地が残されていることを指摘しておきたい。

とはいえ上記の課題は、本論文の意義を損なうほどの決定的な不備ではない。本論文は、エスニックコミュニティとの間に構築された信頼のもと、大人数から協力を得られた調査にもとづく、日本を事例とした有数の本格的なムスリム研究として位置づけられる。また、在日バングラデシュ人のアイデンティティ形成やその変容の要因、そしてホスト社会との関係を緻密に描写しえた貴重な資料として、本論文の内容は今後広く参照されるであろう。総じて、その学術的貢献は十分に認められると判断できる。

2 最終試験

令和 3 年 1 月 12 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条 (1) に該当することから免除し、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。